

初級日本語学習者のテイルの習得に関する縦断研究 —マラティ語、テルグ語母語話者の場合—

菅谷 奈津恵

要 旨

本研究では、様々なテイルの用法について、インド出身の日本語学習者 2 名 (L1 マラティ語、テルグ語) を対象に調査を行い、許 (2000) が横断調査を基に提示した習得順序が縦断データにおいても観察されるかどうかを検討した。データは、約 1 年に渡る日本語母語話者とのインタビューを用いた。分析の結果、両者の発話には、概ね許と同様の出現順序が見られることがわかった。「運動の持続 (±長期)」は早くから正用が見られ、最も難しいとされる「パーフェクト」では、期間を通じて正用がみられなかった。ただし、許 (2000) で比較的容易であるとされた「性状 (±可変性)」については、より難しいとされていた「習慣」に比べ、使用された動詞が少なく、かたまりとしてテイルが使用されていた可能性が高かった。以上の結果を基に、許の習得モデルの妥当性、及び、今後の研究のあり方を検討した。

【キーワード】 第二言語習得、アスペクト、動詞形態素、生産性、かたまり

1. はじめに

アスペクトは、テンスとともに時を表す基本的文法形式であるが、成人の第二言語 (以下 L2) 学習者には習得が難しいと言われている (白井 1998)。日本語の代表的アスペクト形式としてはテイルが挙げられるが、テイルには様々な用法があり、比較的習得が容易なものや難しいものがあることが指摘されている (黒野 1995 ; 許 1997, 2000)。しかし、これまでの研究では横断調査が中心であり、日本語学習者が実際にどのような過程を経て、テイルの用法を習得していくのかという点については、明らかになっていない。本研究では、2 名の初級日本語学習者のテイル使用状況について、縦断的に観察を行う。

2. 背景

テイルの様々な用法について、日本語学では以下の 5 分類が一般的である (吉川

1976 ; 工藤 1982 ; 寺村 1984)。

- 1) 「動作の持続」 子供が公園で遊んでいる。
- 2) 「結果の状態」 そこにペンが落ちている。
- 3) 「単なる状態」 この道は曲がっている。
- 4) 「パーフェクト⁽¹⁾」 漱石はたくさんの小説を書いている。
- 5) 「習慣⁽²⁾」 彼は毎朝ニュースを見ている。

日本語の L2 習得研究では、上記の用法のうち、「動作の持続」と「結果の状態」のどちらが先に習得されるのかを調査したものが多く(詳細は Shirai 2002、菅谷 2002 のレビューを参照)。これ以外の用法も含め、テイルの習得を入念に検討したものに許(2000)が入る。許(2000)は、OPI コーパスを用いて中国語・韓国語・英語母語話者各 30 名(各母語で初級・中級・上級・超級の 4 レベル)の発話資料を分析している。許は、上記の 5 分類を参考に、テイルの用法を表 1 のように細分し、義務的な文脈で正しく用いられているかどうかを検討した。

表 1 許(2000)の用法分類(例文は許 2000 より)

「運動の持続(+長期)」	弟は香港に住んでいます。
「運動の持続(-長期)」	何をしているの。
「性状(+可変性)」	空気が汚れています。
「性状(-可変性)」	学校と家はけっこう離れています。
「習慣 ⁽³⁾ 」	毎日テレビを見えています。
「結果の状態」	葉っぱが全部落ちています。
「状態の変化」	この問題が深刻になっています。
「パーフェクト ⁽⁴⁾ 」	その話なら聞いています。

許(2000)の分類と吉川(1976)らの 5 分類との相違点を述べる。「運動の持続(+長期)」は、所属や職業を表すもの(「中国の会社に勤めている」「大学で生物学を教えている」など)や、「香港に住んでいる」のように長期的な持続を指すものである。「運動の持続(-長期)」は、前述の「動作の持続」に当たり、進行中の動作を表すものである。「状態の変化」は、「増えている」「多くなっている」のように動詞自体の語彙的意味や補助動詞の関係で、その状態が変化しつつあることを表す用法である。「性状(±可変性)」は、「単なる状態」に当たる用法で、その状態が変化しうるかどうかという点で、「性状(+可変性)」(例:この歌は今はやっている)と「性状(-可変性)」(例:家から駅までは離れている)に二分されている。

分析の結果、最も早く習得されるのは「運動の持続（±長期）」であり、以下、「性状（+可変性）」、「性状（-可変性）」、「習慣」、「結果の状態」、「状態の変化」、「パーフェクト」と続くことが報告されている。

許（2000）は、学習者データを基にあらたな分析枠組みを提示した意欲的な試みである。しかし、こうした分類が妥当なものであるか、また、そこで提示された習得モデルが実際の学習者の習得過程を反映したものであるかは、さらなる検証が必要である。許（2000）を含め、先行研究は横断調査が中心であり、学習者の発話を縦断的に観察したものは少ない。学習者の習得過程を明らかにするには、個々の学習者言語を長期的に観察することが不可欠であり（長友 1998）、横断調査と縦断調査の成果を積み重ねていくことが望まれる。

そこで、本研究では、許（2000）の提示した習得順序が、縦断調査でも観察されるかどうかを検討することを目的とする。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

調査対象者は、インド出身の初級日本語学習者2名（Jyoti、Ruby、全て仮名）である。Jyoti と Ruby は、筆者らが運営する日本語習得研究プロジェクト（Language Acquisition Research Project No.9、以下 LARP9）に参加していた。LARP9 は 1999 年 11 月に開始され、週 1 回 2 時間の日本語の授業を行いながら学習者の発話・書き資料を収集し、その習得過程を調査する目的で行われた。

両者は 1999 年 3 月に来日し、ともにボランティアが主宰する地元の日本語教室に通っていた。調査開始時までにボランティア教室で『新日本語の基礎 I』の 20 課までを終了しており、「運動の持続（±長期）」、及び、「結果の状態」に当たる一部の表現（「持っている」、「知っている」、「結婚している」のみ）を学習済みであったと考えられる。LARP9 では、2000 年 5 月中旬に「結果の状態」、翌 6 月中旬に「～ようと思っています」を導入した。日本語レベルは、Jyoti の調査開始時の OPI（Oral Proficiency Interview）判定は初級上で、調査終了時の判定は中級中であった。Ruby には開始時の OPI が実施できなかったが、学習状況及び発話特徴から Jyoti とほぼ同レベルであったと推測される。表 2 に対象者のプロフィールをまとめる。

表 2 調査対象者のプロフィール

学習者	Jyoti	Ruby
年齢・性別	20代半ば・女性	20代半ば・女性
出身国	インド	インド
母語	マラティ語	テルグ語
同居家族	夫（インド）	夫（インド）
来日時期	1999年3月	1999年3月
OPI 判定（調査開始時）	初級上	- -
（調査終了時）	中級中	中級下

3.2 分析資料

収集データは、日本語母語者との一対一のインタビュー（日記インタビュー、OPI）である。中心となるデータは日記インタビューで、これは、毎回授業の後半に学習者に日記を書いてもらい、その後教師と1対1のインタビューを行ったものである。日記インタビューは、LARP9共同運営者4名が交替で行い、日記中の誤用に対するフィードバックを行うほかに、日記に書かれた話題を掘り下げて会話をするを目的とした。従って、日記自体は週末にしたことなど過去の内容が中心だが、そこから現在、未来を含めた様々な話題に広がっている。また、レベル測定として Jyoti に2回、Ruby に1回 OPI を実施しているが、これも分析データに加えている。1回のインタビュー時間は各15分～20分程度である。

インタビュー回数は、体調不良や一時帰国などによりインタビューが実施できないこともあったため、両者で異なっている。データ収集期間及び総インタビュー回数は、以下の通りである。

表 3 データ収集期間と総インタビュー回数

学習者	データ収集期間	インタビュー回数	総インタビュー時間
Jyoti	1999年11月～2000年7月	18回	約300分
Ruby	2000年1月～2001年5月	33回	約530分

3.3 分析方法

インタビュー録音を文字起こしし、以下の手順で分析を行った。まず、文末からテ

イルが使用された個所、及び、テイルを使用すべき個所を抽出した⁽⁵⁾。次に、許(2000, 2001)に基づき、前掲の表1の用法に分類した

用法分類後⁽⁶⁾、①正用、②テンスの誤り(テイタとすべき個所にテイルを使用しているもの⁽⁷⁾)、③過剰使用、④非使用(テイルを使うべき個所に用いなかったもの)に分け、正用率としてTLU(Target Like Use)値を算出した。なお、TLU値の算出に当たっては、テンスが間違っているものもアスペクトとしては正しいため、正用と同様に扱った。計算式は、以下の通りである。

$$\text{TLU} = (\text{正用} + \text{テンスの誤り}) \div (\text{正用} + \text{テンスの誤り} + \text{過剰使用} + \text{非使用}) \times 100$$

また、使用頻度が高い場合でも、同じ動詞が繰返し使用された可能性も考えられるため、各用法で、①正用と②テンスの誤りに用いられた動詞の異なり数、及び、使用された動詞例も提示した⁽⁸⁾。

4. 分析結果

次に各学習者の使用状況を見ていく。図1、2は、インタビュー毎のテイル使用状況を縦断的に示したものである。●印が正用、◎がテンスの誤り、△が過剰使用、×は非使用を表す。記号横の数字は、使用回数を示している。なお、許(2000)の横断調査では、図左側の用法(「運動の持続(+長期)」が最も習得が容易で、右にいくほど難しくなっていた。表4、5は、全体の使用数とTLU値を表したものである。

まず、Jyotiの使用状況を検討しよう。図1から、出現の早いのは「運動の持続(+長期)」(インタビュー1)、「運動の持続(-長期)」、「性状(-可変性)」(ともにインタビュー2)であることがわかる。その後は、「習慣」(インタビュー6)、「性状(+可変性)」(インタビュー9)、「結果の状態」(インタビュー13)と続く。「状態の変化」と「パーフェクト」は、観察されなかった。また、表4が示すように、産出の見られた用法であっても、全体的な使用数は少ない。動詞の異なり数を比較すると、最も多くの動詞に用いられたのは、「運動の持続(-長期)」、「習慣」で各4例ずつであった。他は、「運動の持続(+長期)」、「結果の状態」が各2例、「性状(+可変性)」、「性状(-可変性)」が各1例に過ぎない。

次に、Rubyの分析結果を見る。図2から、出現が最も早いのは「運動の持続(+長

期)」で、初回から使用されていることがわかる。続いてインタビュー5に「運動の持続（-長期）」、インタビュー6に「性状（-可変性）」と続く。「習慣」は、インタビュー10で正用が出現した後は、頻繁に使用されている。「状態の変化」は、インタビュー20に正用が1回あるだけで、「パーフェクト」には、正用が見られなかった。表5を見ると、「運動の持続（±長期）」、「習慣」の頻度が高く、動詞の異なりも比較的多いことがわかる（「運動の持続（+長期）」が6、「運動の持続（-長期）」が12、「習慣」が11）。一方、「性状（±可変性）」は、出現は比較的早かったが、使用数はわずかであり、各1種類の動詞が用いられたにすぎないことがわかる。

図1 Jyoti のテイル使用状況 (●: 正用, ◎: テンスの誤り, △: 過剰使用, ×: 非使用)

		運動の持続		性状		習慣	結果の状態	状態の変化	パーフェクト
		+長期	-長期	+可変性	-可変性				
1	99/10/29	●1							
2	00/2/14		●1		●1				
3	00/2/21								
4	00/2/28								
5	00/3/22								
6	00/4/3				●1	●2			
7	00/4/12								
8	00/4/19								
9	00/4/26			●1					
10	00/5/17						×1		
11	00/5/24					●1			
12	00/5/31								
13	00/6/7	●3. ×1		●1			●1		
14	00/6/7								
15	00/6/21		●2						
16	00/6/28	●1					●1		
17	00/7/12					●2			
18	00/7/19		●1						

表4 Jyoti の用法別使用頻度と TLU

	運動の持続		性状		習慣	結果の状態	状態の変化	パーフェクト
	+長期	-長期	+可変性	-可変性				
正用	5	5	2	2	5	2	0	0
テンス	0	0	0	0	0	0	0	0
過剰	0	0	0	0	0	0	0	0
非使	1	0	0	0	0	1	0	0
TLU	83	100	100	100	100	67	--	--
動詞異なり	2	4	1	1	4	2	0	0
使用動詞	働く、住む	見る、探す、困る 勉強したがる	混む	持つ	休む、見る、勉強する、散歩する	結婚する、知る		

図2 Rubyのテイル使用状況 (●: 正用, ◎: テンスの誤り, △: 過剰使用, ×: 非使用)

		運動の持続		性状		習慣	結果の 状態	状態の 変化	パーフ ェクト
		+長期	-長期	+可変性	-可変性				
1.	00/1/12	●2							
2.	00/1/17	●1							
3.	00/2/21								
4.	00/2/28								
5.	00/3/13		◎2						
6.	00/3/27	●1			●1				
7.	00/4/3	●1							
8.	00/5/17								
9.	00/5/24					△1			
10.	00/5/31		◎1. ×1	●1. ◎1		●1. △2			△1
11.	00/6/7	●4		◎2		△1	●2		
12.	00/6/7	●5. ×1				●1			
13.	00/7/26	●1				●1			
14.	00/8/2								
15.	00/8/23					●5			
16.	00/9/6		●4. △5				×1		
17.	00/9/13		●2			●2			
18.	00/10/4						●1. △1		
19.	00/10/11				●1				
20.	00/10/18		●2			●1		●1	
21.	00/10/25		●1				●1. △1		
22.	00/11/8					●1			
23.	00/11/15					△2	●1		
24.	00/11/22					●2	△1		
25.	00/11/29				●1				
26.	01/1/17						◎1		
27.	01/1/24		◎4			△1	●1		
28.	01/2/7					●3	△1		
29.	01/2/28					●1			
30.	01/3/14		●1. ◎1			●4			
31.	01/4/4					●1			
32.	01/4/25	●1							
33.	01/5/9	●2	◎1			●1			

表5 Rubyの用法別使用頻度とTLU

	運動の持続		性状		習慣	結果の 状態	状態の 変化	パーフ ェクト
	+長期	-長期	+可変性	-可変性				
正用	18	10	2	3	24	6	1	0
テンス	0	9	3	0	0	1	0	0
過剰	0	5	0	0	7	4	0	1
非使	1	1	0	0	0	1	0	0
TLU	95	76	100	100	77	58	100	0
動詞異なり	6	12	1	1	11	5	1	0
使用動詞	住む、働 く、仕事 をする、 勉強す る、教え る、読む	降る、思 う、探 す、読 む、話 す(以下 略)	混む	似る	降る、離 婚する、 教える、 勉強する (以下略)	割れる、 閉まる、 かぶる、 知る、来 る	短くな る	

5. 考察

Jyoti、Ruby の分析結果は、以下に述べるように概ね許 (2000) の横断調査に沿うものであった。第一に、許 (2000) で習得が容易とされていた「運動の持続 (+長期)」については、両者とも早くから使用しており (Jyoti、Ruby とともにインタビュー1 で出現)、使用頻度も比較的高くなっていた。特に使用数の多かったのが「住む」という動詞である。正用のうち、Jyoti で 4/5、Ruby で 9/18 が「住む」であった。許 (2000) でも指摘されているように、「住む」は自己紹介等でしばしば使用される表現であり、早くから定着していたことが推測される。

第二に、「運動の持続 (-長期)」においても両者とも出現が早く、正用数、動詞の異なり数も他の用法に比べ、高くなっていた (異なりは、Jyoti が 4、Ruby が 12)。この用法が容易な説明としては、これまで、対象者の母語に対応する進行形がある点が指摘されている (許 2000、Shirai 2002)。Jyoti と Ruby の母語、マラティ語、テルグ語にも進行形があるため (Rajeshwari 1997 ; Krishnamurti & Gwynn 1985)、L1 からの正の転移が習得を促進していた可能性があるだろう。

第三に、許 (2000) で習得が難しいとされていた「状態の変化」及び「パーフェクト」は、本研究の対象者にとっても難しい用法であったようだ。「状態の変化」は、Ruby に正用が 1 例ずつ見られただけであった。許 (2000 : 27) は、この用法が難しい理由として、「『状態』に『変化』という新しい事象が加わって、認知的負荷が大きくなったこと」を挙げている。ここで筆者が付け加えたいのは、許が挙げている「高まる」、「進出していく」といった表現は、初級学習者には使いこなすことが難しいと推測され、こうした語彙習得の難しさや形態的複雑さも影響した可能性があるという点である。実際、Jyoti、Ruby の発話では、「状態の変化」に使用されうる表現は、「一なる」以外はほとんど見られなかった。

「パーフェクト」については、本研究では正用が全く見られなかった。英語の L1、L2 習得でも、パーフェクト (現在完了形) の習得は、単純過去形よりも遅れることが指摘されている (Bardovi-Harlig 2001)。その要因として、Bardovi-Harlig は、形態的統語的な (morphosyntactic) 複雑さや意味的複雑さ、インプット頻度などの複数の要因が関わっている可能性を挙げている。しかし、日本語の場合は、「パーフェクト」は「運動の持続」等と同じ形式 (テイル) で表されるため、形態的複雑さは当てはまらない。よって、他の要因、つまり、意味的複雑さやインプット頻度が少ないこと等の影響が

推測される。例えば、JNS の会話では、西・白井 (2004) が『主婦の一週間の談話資料』(井出他 1984) を分析したところ、テイルのうちパーフェクトに使用されたのは、全体の使用数の 7% とかなり低かった。

さて、ここまで許 (2000) との共通点を見てきた。以上の点から、横断データを基にした習得順序は、縦断データにおいても支持されたと言えるだろうか。疑問が残るのが、比較的易しいとされている「性状 (±可変性)」である。両用法とも、使用された動詞は、1 種類ずつに過ぎなかった。例えば、「性状 (+可変性)」で使用された動詞は、両者とも「混む」のみである。Jyoti、Ruby とも、「混む」は常にテイル形で使用されていたため、かたまりとして使用されていた可能性が高い。これに対し、より難しいとされる「習慣」のほうが、「性状 (+可変性)」よりも動詞の異なり数が高くなっていた (Jyoti が各 4、Ruby が 11)。

また、かたまりとして使用されたと考えられるものは、Ruby の「結果の状態」についても観察された。Ruby は過剰使用も含めると「結果の状態」に 11 回テイルを使用しているが、そのうち最も多いのは、「知る」であった (5 回)。「知る」は、自発的な発話では、常にテイルの形で使用され、過剰使用にもつながっている。以下の例では、「知りました」が適切だと思われるが、Ruby は「知っています」と述べている。その後、教師の促し (「知り・・・」) を受けて、「知りました」と自己訂正を行っている。

[Ruby インタビュー 24]

R : (今日の授業で) 日本でも、おも、お見合いです、にする、お見合いするになる人、する人も、いるとわかり、いる一、いるを知っています。

T : いる、えーとそれは今までも知っていましたか、今日、知り・・・

R : い、今日知りました。

学習者がテイルをかたまりで覚える場合があることは、許 (1997 : 39、2000) でも指摘されている。その割合は果たしてどの程度なのであろうか。こうした問題を考える上で、生産性 (productivity) の指標が重要となってくる。生産性については、L1 習得研究において複数の動詞で同じ形態素が試用できるか (Otomo 2004) という点や、同じ動詞が別の語形でも試用できるかどうか (Tomasello 2000) という点から、検討がされている。「性状 (±可変性)」は、いずれの指標でも生産性が低いということにな

る。ただし、本研究の分析データは、インタビューデータであり、ある語形が使用されていないとしても、単に使用する機会がなかっただけの可能性も高いため、今後の検討が必要である。

6. おわりに

本研究では、2名の初級日本語学習者の発話を資料として、様々なテイルの用法の使用状況を調査した。その結果、本研究の縦断データにおいても、許(2000)の横断調査とほぼ一致した出現順序が確認された。「運動の持続(±長期)」は早くから正用が見られ、最も難しいとされるパーフェクトでは、期間を通じて正用がみられなかった。許(2000)と異なるのが「性状(±可変性)」である。許で「性状(±可変性)」より難しいとされていた「習慣」に比べ、使用された動詞が少なく、かたまりとして使用されていた可能性が高い。

しかし、今回の調査ではインタビューデータを分析対象としたため、学習者がテイルをどの程度生産的に使用しているかは明確でない。今後は、誘出タスクも併用し、様々な動詞でテイルが使用できるか、ルヤタとの使い分けができるかという点を調査する必要がある。また、本研究は2名の学習者を対象としたケーススタディであり、他の学習者の縦断データでも、同様の傾向が見られるかどうかを検討したいと考える。

注

- (1) 「パーフェクト」は、「経験」(吉川 1976)、「回顧」(寺村 1984)等の名称も用いられているが、ここでは工藤(1989)にならい、「パーフェクト」と呼ぶ。
- (2) 「習慣」は、「くりかえし」(吉川 1976)等の名称も見られるが、本稿では、瞬間的な動作が何度も行われることによって進行の意味を表す「繰返しの進行」(例：ケンがドアをたたいている)と区別するため、「習慣」を用いる(Shirai2000)。
- (3) 許(2000)では、「繰返し」。
- (4) 許(2000)では、「経歴・経験」。
- (5) 教師発話を繰り返している箇所、日記を読み上げている箇所は、分析から外した。
また、テイナイ、テイタには否定及びテンスという要素が加わるため、本研究では肯定の現在形であるテイルのみを分析対象とした。
- (6) Rubyには2例、発話意図が不明なため用法別に分類できないものがあつた。

- (7) テイルとすべき箇所にテイタを使用した例は見られなかった。
- (8) 本研究では「知っている」、「知っています」のように語形が異なるものも同じ動詞として1と数えている。

参考文献

- (1) 井出祥子編 (1984)『主婦の一週間の談話資料 解説・本文編』文部省科学研究費補助金特別研究「情報化社会における言語の標準化」総括班刊行物
- (2) 科学技術者研修会編 (1990)『新日本語の基礎 I・本冊漢字かなまじり版』スリーエーネットワーク
- (3) 許夏珮 (1997)「中上級台湾人日本語学習者による『-テイル』の習得に関する横断研究」お茶の水女子大学大学院修士論文
- (4) 許夏珮(2000)「自然発話における日本語学習者による『-テイル』の習得研究：OPI データの分析結果から」『日本語教育』104, 20-29.
- (5) 工藤真由美 (1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐる」言語学研究会編『ことばの科学・3』むぎ書房 53-118.
- (6) 白井恭弘 (1998)「言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子編『ボーダーレス時代の外国語教育』未来社 69-108.
- (7) 菅谷奈津恵 (2002)「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観：『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『言語文化と日本語教育』2002年5月特集号 70-86.
- (8) 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (9) 長友和彦 (1998)「第二言語としての日本語の習得研究」橋口俊秀・稲垣佳世子編『児童心理学の進歩 1998 年度版』日本児童研究所 79-110.
- (10) 西由美子・白井恭弘 (2004)「会話における『ている』の意味：アスペクト二構成要素理論による分析」南雅彦・浅野真紀子編『言語学と日本語教育3』くろしお出版 231-249.
- (11) 吉川武時 (1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 155-327.
- (12) Bardovi-Harlig, K. (2001) Another piece of puzzle: the emergence of the present perfect. *Language Learning*, 51, Supplement 1: 215-264.

- (13) Krishnamurti, Bh. & Gwynn, J. P. L. (1985) *A Grammar of modern Telugu*. Oxford: Oxford University Press.
- (14) Otomo, K. (2004) *Comparative Research for a Developmental Index for first and second language of Japanese and English*. Grant-in-Aid for Scientific Research (B) 13410034.
- (15) Rajeshwari, V. P. (1997) *Marathi*. NY: Routledge.
- (16) Shirai, Y. (2002) The Aspect Hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5: 42-62.
- (17) Tomasello, M. (2000) Do young children have adult syntactic competence? *Cognition*, 74: 209-253.

すがやなつえ／聖学院大学非常勤講師

A Longitudinal Study on the Acquisition of the Japanese Imperfective Aspect Marker *-te i ru-* by novice learners
- A case of Marathi and Telugu speakers -

SUGAYA Natsue

This study investigated the acquisition of multiple meanings of the Japanese imperfective aspect marker *-te i ru*. Using longitudinal interview corpus from two instructed learners (L1 Marathi and Telugu), I examined the Sheu's (2000) acquisition model, which is based on the cross-sectional data. The results from the analysis, which were descriptive in nature, were generally consistent with Sheu's finding. Both learners used the progressive earlier than other meanings, and the correct use of the perfect was not found throughout the observation period. On the other hand, simple state (\pm changeability), which was considered as relatively easy in the Sheu's study, showed lower productivity than habitual. It is suggested that further investigation should address the issue on the productivity of *-te i ru*.

(Seigakuin University)